

ちょっと ブレイクしませんか?

市民ケーン [1941年]

第 13 回

十七世紀、仏蘭西の名門貴族ラ・ロシュフコー公爵は、「箴言集」(岩波文庫 二宮フサ訳 1989)で「誰の助けも借りずに独りでやっていく力が自分にはある、と信じる人は、ひどい思い違いをしている。しかし、自分なしには世の中はやっていけないと、信じる人は、なおさらひどい思い違いをしている」と記している。

1941年の映画「市民ケーン」は、映画史上に燦然と輝いている名作だ。大邸宅で「バラの蕾(つぼみ)」という謎の言葉を残し新聞王ケーン(オーソン・ウェルズ)は死んだ。ニュース記者トムスは「バラの蕾」の中にケーンの真の人間性を解く鍵があると信じ、彼の生涯に関係のある人々に会うことになった。ケーンが幼少の頃、宿泊代のかたにとった金鉢の権利書から母親が思わぬ金持ちになった。そのために彼は財産の管理と教育のため、片田舎からニューヨークに。青年になったケーンはかねてから興味を持っていた新聞経営にのりだした。まず破産寸前の新聞社を買とり友人の協力を得て完全に立ち直らせた。さらに斬新で強引な経営方針と暴露と煽動の編集方針で遂にニューヨークの新聞に育てあげた。読者を楽しませるが決して真実を語らぬ彼の態度を友人は諷めるが、飛ぶ鳥も落とすケーンの勢いには全く通じなかった。世界第6位という財産をバックに報道機関をことごとく掌中にし、彼の権力はもはや絶対的なものになった。一方大統領の姪工ミリーをしとめるに至り知事から大統領への座は目前のものとなった。しかし圧勝を予想された知事選挙の数日前に、オペラ歌手スーザンとの情事をライバル紙で暴露され形勢は逆転。それと同時に妻はケーンのエゴイズムに耐え切れず去っていった。離婚、落選という初めての挫折にケーンはスーザンにご執心となる。彼女の素質も考えず巨大なオペラ劇場を建て新聞で大々的に宣伝をしたが、それはかえって彼女にプレッシャーとなり自殺未遂へと追いやり、遂には彼女にも見放される。そしてケーンは孤高の死を遂げる。死後身辺が整理され、おびたしいがらくたが暖炉に投げこまれた。そのなかの1つ幼少の頃に遊んだソリが燃えあがる瞬間、ソリの腹に「バラの蕾」の文字が現れた。

「市民ケーン」から70年、瓦版からネット配信時代に移り、名門シカゴトリビューンの倒産に象徴されるように、新聞業界も深刻な経営難に陥っている。企業どころか自治体や国も例外ではない。企業の継続・発展には、絶えざる技術(イノ)革新(ベーション)とリーダーシップの統合が不可欠だ。「箴言集」は「自尊心は、人間喜劇のあらゆる登場人物を独りで演じたあと、あたかも手練手管や多種多様の返信に疲れたかのごとく、素顔で現れ、尊大さによって正体を明らかにする。だから正確に言えば、尊大さとは自尊心の表明であり宣言なのである」とも記している。

権勢を極めた平清盛が「驕る平家は久しからず」「盛者必衰」を千年以上前に語ったとされるが、盛者にも驕る者にも縁がない人々にも自尊心と利他愛を如何に癒合させるか、教えられるところの多い作品である。

精神科医・映画評論家

かゆ かや ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授

